

Whooops!

2018 SUMMER Vol.19



多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ発行

特別対談 赤坂真理×安藤礼二

「天皇と女性」

「芸術」と「医療」／稲葉俊郎

生命の樹を上れ！

多摩美の四季

ミケランジェロの彫り姿



ハーバリウム 標本に植物の美を見る
発見！「絵本でほっこりくつろぎカフェ」
不定期連載 師の言葉／室越健美

3 特別対談

赤坂真理×安藤礼二
／「天皇と女性」

7 Tamabi Report

稲葉俊郎
／「芸術」と「医療」は深いところでつながっている

8 Whooops! 体験記

ハーバリウム 標本に植物の美を見る

10 写真特集

多摩美の四季

12 Whooops! 探訪記

発見！「絵本でほっこりくつろぎカフェ」

14 不定期連載「師の言葉」

室越健美先生
／「デッサンは必要なのか？」

16 Whooops! 見聞記

生命の樹を上れ！
／《太陽の塔》 内部公開
未完成作品にミケランジェロの彫り姿を見る
／「ミケランジェロと理想の身体」展



(上) Iris-Style Naoさんとハーバリウム作品→P.8

(下左)「ミケランジェロと理想の身体」展(国立西洋美術館)より《アメーラの運動選手》(紀元前1世紀、大理石、高さ131cm、フィレンツェ国立考古学博物館) 展示風景→P.18

(下右) カフェ「うさぎの絵本」の看板娘→P.12

Whooops! Vol.19 / 2018 SUMMER

発行日=2018年07月14日

編集長・デザイン監修=小川敦生(多摩美術大学芸術学科教授)

編集・誌面デザイン=板垣万由子、青木真梨恵、佐藤仁奈、豊島瑠南、奈良島隆人

表紙レイアウト=板垣万由子

表紙写真=《太陽の塔》外観(→P.16)

発行=多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒192-0394 東京都八王子市鎌水2-1723

印刷=株式会社ハシモトコーポレーション

問い合わせ先=aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77 Webmagazine「タマガ」=QRコード

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。



Whooops! (ウーブス!) について

本誌を手にとっていただき、ありがとうございます。
誌名「Whooops!」は、「あっ!」という驚きを表しています。
あなたの中で何かが弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい。
そんな思いを込めて制作しました。
お読みいただくうちに小さな「あっ!」が生まれてくれますように!

特別対談

赤坂真理 × 安藤礼二

「天皇と女性」



5月31日、小説家の赤坂真理氏を多摩美術大学に招き、本学芸術学科教授で批評家の安藤礼二氏との特別対談を行った。平成が終わろうとしている今、「天皇とは何か」「女性天皇がなぜいなくなったのか」など、近年の問題をテーマに、自由な視点で語ってもらった。

天皇はもともと どのような存在だったのか

安藤 「赤坂さんは『東京プリズン』という小説で、天皇の問題は避けて通れないということを世の中に問うていますね。私たちは『東京プリズン』が刊行される前にお会いしましたよね」

赤坂 「はい。お会いしました」

安藤 「私は折口信夫という人物をずっと研究しています。折口は、「日本の神道とは何か」ということを常に問いかけた人です。神道は天皇の問題ともつながってくるのですが、明治にもすごく大きく変わるんですよ。」

今当たり前のように言われている、長男だけが天皇位を継がなきゃいけないというのは、完全に明治以降に作られた考えなんです。実際は、江戸時代にも女性天皇が存在しました」

赤坂 「奈良時代は女帝の時代だったと言えるのでは？」

安藤 「もう一つ、「国家神道」の問題があります。もともと神道はいわゆる教義のある宗教ではなかった。古くから神道で行われていたのは、いわゆる神がかりというか…」

赤坂 「憑依？」

安藤 「そう、憑依。人に何かを取り憑く。「霊媒」は英語ではメディウムといいます。要するに、異次元の世界から鳴り響いてくる声をチューニングする存在です。まさにメディアそのものとなって、超現実と現実をつなぐ。日本でこの役目をしていたのが、基本的には女性だったんです。そして、この女性が担っていた霊媒の役割を、明治になって強引に男が奪ってしまったんじゃないか。」

もともと天皇というのは江戸時代ま

で両性具有的な存在で、男でもお化粧をして、女性のように扱われていたんですよ。でも、それが明治以降になると、男らしいイメージに変わってしまうんです」

赤坂 「白馬に乗った、軍服を着た大元帥という感じに」

安藤 「そうです。しかしやはり、代替わりをするときに、非常に女性的な役割を果たすんです。まあ、一般には今後も公開されないと思うので、誰にも真相はわからないのですが、天皇は寝具が敷かれた部屋で一晩を過ごさないといけないんですよ。これって、沖縄の習俗などを見ると、明らかに女性と神が交わる習わしと同じです。それを男性の天皇がやるという、完全に不自然な状況がずっと続いているんです。」

天皇というのは、ある種、女性性を身にまとっている。なのに、その位を

長男にしか継げなくしているんです。これが、最近のさまざまな問題を引き起こして…」

江戸時代まで女性天皇は存在していた

安藤 「ちょうど今まさに、年号が変わろうとしていますよね？ 次の天皇が立つという時に、政治的、経済的、そして近代的にもう一度天皇を考える。私は批評家ですが、これは小説家にとっても非常に重要なことだと思うんです。こんな問題意識が、私と赤坂さんの共通のものとしてあるのではないですか」

安藤 「日本の歴史は日本書紀までしか遡れないんです。日本書紀は完全に男性的な主観で書かれているのですが、一つだけ女性天皇が主人公になっている巻があるんです。神功皇后です。もともと天皇の妻だった。神功皇后は強烈な「神がかり」をしていて、言うことを聞かなかった男の天皇は死んでしまうんですよ。

この一巻が独立しているということは、男性的な主観で書かれた日本書紀でも外せないほど、神功皇后は強い力を持っていたということなんです。ところが明治に入る時に、この神功皇后を天皇として数えるか数えないかが大きな議論になった。そ

赤坂 「最近『お気持ち』という今上天皇のビデオメッセージを見ていたら、何重にも引き裂かれていて、気の毒になってしまった。日本国憲法施行以降は、アメリカの書いた「象徴」という言葉に、天皇の歴史を見れば、戦後との断絶のほかに、原理的な天皇の在り方との間にも断絶がある。それを一人の人間が背負うことの重さ。そして、憲法が個人の立場を縛っているという、一種の違憲状態」

安藤 「明治政府は、すごく強い天皇のイメージを作ろうとしたんです。でも本当は無理なんですよ。逆説的な言い方になりますが、天皇は現実的な力を持たないからこそ、ここまで長く存続してきたんです。唯一、後醍醐天皇くらいです、強烈な力で現実を覆そうとしたのは。本来、天皇は現実的な力においては全くの無力。でも、無力だからこそ、霊的な力のメディアになり得た。

第2次世界大戦までは明治時代に作った強いイメージでやっていたのだけど、全部終わった後、天皇はむしろ昔に戻った。リベラルっていいのでしょうか…。いろいろな見解が出た後、最後に一言いえばそれで決まるような存在として必要とされていたんです」

赤坂 「なぜだか、アメリカの描いた天皇像のほうが、大日本帝国憲法の中に記された天皇像より、実像に近いような、不思議な感じが私はします。しかし、霊的なメディアであるという性質のことは、もちろん憲法には誰も定義しなかった。一方で、明確に定義されたのは、「血統」が絶対であるという話。ただひとつの血統が日本のはじまり以来、絶えることなく続いてきたということがありますよね？」

安藤 「日本書紀では、結構血まみれな争いをしています」

赤坂 「そうですね。結構血まみれ篡奪劇がありますよね」

安藤 「これだけ長い間一つの家が続くというのは、実は幻想に過ぎない。日本書紀は天皇の歴史そのものなのですが、大体三代続くとすぐ争いが起きます。つまり、三代くらいしか続かないんです。そのために家が分立し



赤坂 「原理的に「天皇とは何か」ということには非常に興味があります。それとは別に、「天皇の利用のしかた」が日本史を決定づけている感をわたしは持っていて、無力な権威を、時の権力者が利用する、その方法論が日本史の底を流れている。利用したほうが得だから、誰も天皇を討たない。そうして近代まで残った天皇が、明治の神話のつくりかたに利用された。明治では、それが、憲法という国のかたちの文書に明文化されさせました。今の日本も、その延長線上にあります。一方で、原理的なことを言うなら、天皇霊をおろせる人が、天皇になれる。だから天皇は同時多発もできるし、自分の中に何かを孕める女性のほうが、むしろ向いているといえます」

して、明治政府は神功皇后を天皇として数えないと決めたんですよ。でも、それまでは神功皇后は天皇の一人に数えられていました」

メディアとしての天皇

赤坂 「今上天皇の生前退位（譲位）の希望がとおり、平成が終わるらしいということで「平成とはどんな時代だったか？」というインタビューの依頼がたくさんきているのですが、はっと気づいたのは、これって妙な質問だなと。「一世一元の制」ができたのは、明治。それ以前は、名と元号は一致しないし、譲位は当たり前」

安藤 「そうなんですよ。ここ150年くらいの間に作られた制度が目くらましになっている」

ていて、どんどん天皇が継がれていくシステムが作られたのだと思います」

神話に見る天皇の誕生

赤坂 「天皇について一つ不思議なことがあります。中国みたいに何朝、何朝と変わっていかず、天皇という一つの「箱」にみんなが入ろうとする。どうしてなのでしょう？」

安藤 「直接の答えにはならないかもしれませんが、神話では、アマテラス（天照大神）とスサノオ（素戔鳴命）という姉弟が争いをしている、姉が弟の剣を取って、口でかむ。そしてふっと吹くと5人の男の子が生まれる。次に弟のスサノオが勾玉をかんで同じように吹くと3人の女の子が生まれる。これは明らかに近親相姦なんですよね。それで生まれた長男が天皇になったんです。では後の男2人はどこに行ったのか。それも実は分かってるんです」

赤坂 「ほう！ 分かってるんですか？」

安藤 「出雲大社です」

赤坂 「ああ、そうか！」

安藤 「出雲にはもう一つの皇室家があるのですが、明治時代に宗教を国家神道にしなきゃいけないという時に、出雲は政府に逆らうんですよ。それで、国家神道の枠から抜けて新興宗教になったんです。そして自分たちが何をやっているかを全部公開したんですよ。その時に、出雲大社を治める「国造」っていうのがあって、その国造の儀式で肉体的には死んでも魂は死なないというのがあった」

赤坂 「あの儀式、すごく面白くて好き。もうひとつ、出雲の国造が死ぬと、遺体を湖に沈めるという話が好きです」

安藤 「いいですよ。どういう儀式かというと、出雲大社と対を成す熊野大社というところに「永遠」の火が灯っている。前の国造が死んだ時に次の国造はそこから自分の火をもらってきて、その人はそれから死ぬまでその火を使って調理したものしか食べてはいけません。肉体は死んでしまうけれど、火は魂であり、日常生活のすべてを規定する。赤坂さんが言ったように、肉体は「箱」みた

いなもので、そこに入っていき魂の方が重要なんです。結局それが、日本の政治、経済、文化などの通奏低音のようなものとしてある」

アジアの シャーマニズムと日本

赤坂 「肉体は入れ物で、魂がそこに入って、肉体の死後も魂は続き、乗り物を代えてゆく、という話は、宗教やスピリチュアリズムにはよくありますよね？」

安藤 「ありますね」

赤坂 「でもそれは宗教やシャーマニズムの王であり、そういう「王」が日本のようなかたちで現在まで残っているというのは稀で、その意味では日本は実は、政教分離は、実は完全にはできていないのではないかと思うのです」

安藤 「不思議ですよ。考古学の話になりますが、日本が朝鮮半島を植民地にした時に、北朝鮮には日本と似たような古墳がたくさんあって、それをガンガン発掘していった。そうした

ら日本の高松塚古墳にも同じような壁画が出てきて、明らかに天皇家は朝鮮半島を経て日本にきたことが分かった。今は誰も言いませんが考古学界では分かっているし、天皇も多分認識しているから、朝鮮半島は自分の故郷なんだと言っています。そもそも、北朝鮮や満州は強烈なシャーマニズムの世界です。多分、シャーマニズムが強力に生き残った一つの事例が、日本の皇室の核になっている」

赤坂 「前にお話をうかがった時、満州と手を結べたのはどちらもシャーマニズム文化だったからで、漢民族ということでは無理だったという話がありましたよね？」

安藤 「満州に行くと、清朝最後の皇帝、溥儀が住んでいた住居が残っていて、そこへ行くと金ピカの仏像がある。明らかに日本の密教と同じ世界なんです。満州の宗教はほとんど日本の密教と等しい世界で、日本書紀に描かれた天皇制は、そのシャーマニズムを強固に固定されたものなんですよ。



赤坂真理（あかさか・まり）

小説家。東京生まれ。1995年『起爆者』で小説家に。『ヴァイブレイタ』、アメリカで天皇の戦争責任を問う少女を描いて評判となった『東京プリズン』などのほか、批評にも情熱を持ち『モテたい理由』『愛と暴力の戦後とその後』などの著書がある。

アジアに残っているシャーマニズムは日本のように女性だけでも限らない。しかし沖繩などをみると、日本では明らかに女性が霊的な力を持っている。シャーマニズムの日本的な変容として天皇のシステムが構築されたんじゃないかと思います」

女性天皇には 大きな力があつた

赤坂 「天皇が男性になった理由を私なりに考えてみて、一つだけ単純なメリットに思い当たったんです。それは、男性の方が子孫を多く残しやすいということです」

安藤 「要するに、いろんな女性を相手に子どもを作りやすいということですか」

赤坂 「はい。血統を継ぐ天皇候補をいっばい残しやすい。この一点が、男性のメリットとして残りました」

安藤 「ただ、日本書紀などをみると、それでも血統は断絶する。やはり、男だけで継いでいくのは難しいんじゃないかな。今は、実の親と実の子の結びつきがすごい強いじゃないですか。明治になっても養子縁組が簡単に行われていたので、家を実際の血とは関係なく本当に優れた人間が継いでいくという考えがあつた。血族主義は、近代になって作られた幻想だと思えます。もっと家族が自由に離散できて、また集合できるあり方が昔はあつたんじゃないでしょうか。」

赤坂 「今おっしゃったのは「家制度」の話と近いのですが、今の天皇制は、家

制度と血統主義とを混ぜていて、そこがまた苦しい。そして女性天皇は「万世一系的ロマンス」には脅威となる。なぜなら、「母親が天皇」というファクターが入ると、皇位継承の順位が複雑になります。母親の立場の順に入れ替わる。実際、折口信夫が『死者の書』で主人公とした大津皇子は、天武天皇から見れば、草壁皇子と同じ「息子」ですが、その妻の持統天皇から見ると「息子草壁皇子の政敵」であり、その理由で濡れ衣を着せられ処刑されたといひます。まあ、一夫一婦制だと異母兄弟の問題はないとはいえませんが、今度は、皇位継承者が極端に少なくなる。それで男子だけというと、存続そのものが危うい。今の天皇制には何重にも無理があります」

安藤 「そうなんですよ。日本書紀の最後は持統天皇の巻で終わるんです。始まりがアマテラス、そして途中で神功天皇、最後に持統天皇…。このように見ても、女性天皇は大きな流れとして存在していたんじゃないかと思ひます。虚心坦懐に日本書紀を読み直すだけでも、統治するためには明らかに女性的な力が必要だつたんだと思ひます」

天皇を再考する

赤坂 「実は、私はなぜこんなに天皇に惹かれ、天皇にかかわる『東京プリズン』という小説を書かなきゃいけないのかなど不思議に感じていたんで

す。乞食の芸能者のようなところもあるし、貴族の頂点のようでもある。誰も討たずに、利用してきたし、天皇の利用によって、日本社会では「誰も責任をとらなくていい仕組み」ができたように思うほどです。それは、今現在もずっと続いています。一方で原理的に天皇を考えたとき、無力なもの強さ、美しさ、というものに惹かれる。それは現在の「天皇制」とはもはや別物だけれど、「天皇」という個人の中に、その美が見いだせることは、ある。今上天皇などにはそれを感じます。自分としては、天皇に惹かれた直近のきっかけは、「なぜ極東軍事裁判で裁かれなかったか？ それをどうして大多数の日本人が無言のうちに認めたか？」ということでした。「制度」と「原理」に乖離があつて、そしてそれを問題にしようとしたとき、とりまく「感情」がものすごい。これはなんなのだろうと思ひました」

安藤 「私もそうですが、昭和が平成に変わった時を知っていたからかもしれないですね。」

私はあの時、中途半端に天皇制が存続したという感覚を強く持ったんですよ。もっと根本的にいろいろ考えられたし、何かほかの方法があつたんじゃないかと。昭和が終わって平成になるほぼ5年前くらいから、そろそろ天皇制が終わるんじゃないかという感覚はありませんでしたか？ 今またそういう時期がきているのかもしれないですね」



安藤礼二（あんどう・れいじ）

批評家。東京生まれ。2002年『神々の闘争 - 折口信夫論』で群像新人文賞評論部門優秀作を受賞し、日本近代思想史、民俗学をベースに評論活動を始める。代表作として『光の曼陀羅 日本文学論』、『折口信夫』等がある。

企画・構成・レイアウト＝奈良島隆人

撮影＝藤巻妃、松澤祥、桑原仁太

（多摩美術大学グラフィックデザイン学科）



「芸術」と「医療」は深いところでつながっている

稲葉俊郎さん(東京大学医学部附属病院・循環器内科助教)

東京大学医学部附属病院・循環器内科助教の稲葉俊郎さんが、5月26日に本学科の授業「21世紀文化論」のゲスト講師として招かれた。タイトルは『生きること 芸術と医療』。芸術と医療という二つの分野は一見すると別の次元にあるように感じるかもしれない。しかし、両者は深いところでつながっており、稲葉さんはその接点を探究しているという。



アール・ブリュットについて話す稲葉さん

「人間の全体性を取り戻す営みという意味で医療と芸術は同じだと思っています」

講義の冒頭で稲葉さんは医療と芸術の接点とは何かを語った。人間は生きていくだけで「全体性」を失っていく。それを取り戻す手段が医療や芸術なのだという。人間が60兆から100兆個もの細胞から成り、臓器など身体ユニット化した細胞を動かすことで生命を運営しているということは忘れられやすく、病気になることで初めて身体のことを意識する。これが「全体性を失っている」ということだ。

体の複雑化に伴って心も複雑化した結果、心は「意識」と「無意識」に分かれた。西洋ではこの二つをはっきりと分けて考える一方で、東洋では表層意識と深層意識がグラデーションのようにつながっていると考える傾向にあるという。意識は内側と外側、つまり睡眠と覚醒のリズムを持つことでバランスを保ち、夢や瞑想はその二つをつないでいる。そこには「本当の芸術が存在している」と稲葉さんは言う。

次に、「身心一如」という興味深い言葉が紹介された。「からだ」と「こころ」はもと

も同じで直結しているということだ。人の心は「あたま」、すなわち脳にあると思われがちだが、それは「偽のこころ」だ。覚醒時には本物の心と頭の間に蓋のようなものがある状態になっている。睡眠時にそれが取れ、心と頭がつながると夢を見るという仕組みなのだという。

また、人間はしばしば葛藤を起こす。葛藤はよくない状態とされるが、実際は「いいことだ」と言う。二つの対立したものが意識できるからだ。その安易な解決法が片方を無意識に押し込む「抑圧」で、抑圧されたものは「影」となりマイナスのレッテルを貼られやすくなる。そして影が精神症状や身体症状として表れたり、他者に投影して認識されたりしてしまう。これでは解決にはならない。では真の解決法とは何か。それは一つ上の次元から認識することだという。対立関係にあるものは片方がプラス、もう片方がマイナスではなく、両方にプラスとマイナスの側面がある。矛盾は同居できるということを認識するのが真の解決になるという。人間の意識は構造化されており、それは常に改変される。これが「成長」だ。ユングが晩年に建てたポー

リングンの塔はまさにそれを表している。

西洋医学は病気を「治す」ものとされる。しかし、人間は「治る」力を持っている。これを高めるのが芸術なのだ。「生(き)の芸術」とされるアール・ブリュットは発表を目的とせず、「治る」力を高める自分のための芸術だ。それだけでなく、他者に感動や衝撃を与えて癒すことにもなりうる。

岡本太郎は、『今日の芸術』という本で絵を描くことが本能の欲求かつ生命の喜びであると述べている。東田直樹の詩や文は、自閉症ゆえに難しいコミュニケーションを取る手段になっており、その中に深い思考が見えてくる。ここからも、芸術が生命の営みであり、心を表現するものであることが窺える。

現代は医療が進歩している一方でストレス社会でもある。だからこそ、芸術によって癒され、時に人を癒すことが求められるのではないか。

取材・文・撮影・レイアウト＝板垣万由子



稲葉さんと、今回の「21世紀文化論」を担当した本学芸術学科の鶴岡真弓教授

稲葉俊郎(いなば・としろう)

医師。東京大学医学部附属病院循環器内科助教。1979年熊本県生まれ。心臓の治療を専門としている。著書に「いのちを呼びさますもの一ひとのこころとからだ」(アノニマ・スタジオ)など。また、絵画も制作している。

Whoops! 考 ハーバリウム 標本に植物の美を見る

近頃知名度が上がり、雑貨屋やテレビなどで見かける機会の増えた植物標本「ハーバリウム」。瓶の中に閉じ込められた植物は、他の鑑賞形態とは異なる魅力を持っている。なぜハーバリウムはこんなに美しいのかを考えてみた。



ハーバリウムとは、植物を専用のオイルとともに瓶の中に閉じ込めることにより作った内部空間を楽しむ植物標本だ。その作り手のひとり、Naoさんは相模原市でハーバリウム作りのレッスンをしている日本ハーバリウム協会の認定講師だ。

材料の植物はドライフラワーやプリザーブドフラワーのように乾燥している必要がある。また、瓶の口に入るサイズであることも必要だ。そういった植物をピンセットで中に入れ、ボトルシップのように組み合わせながら空間を作っていく。いろいろな角度で見た場合の外見や、オイルを注いだ際に配置が変化しないようにするといったバランスを考えるのがポイントだ。Naoさんは、置いたハーバリウムに光が当たった時の美しさと、中身が動かないようにすることを考えながら、瓶の中いっぱいの大きさの世界を作っているという。

しかし、Naoさんは「考えて作るよりも、フィリングで作った方がいいデザインになりやすい」

と話す。販売用のハーバリウムを作る際は、客に買ってもらえるデザインを考えなくてはならない。また、ハーバリウムは色とりどりの植物の並ぶ姿が美しいため、数本だけ売れ残った姿は好ましくない。昨年秋の多摩美術大学の芸術祭に出店した時は好調な売れ行きのために「好ましくない、状況になってしまい、補充のために「販売用」を多く作る事となって苦労したそう。しかしNaoさんは売るために作るよりも、講師の立場でいろいろな人が個性を發揮して作ったさまざまな姿のハーバリウムを見ることを楽しみにしている。

Naoさんのハーバリウムとの出会いは雑貨屋だった。その美しさに、思わず「二度見した」という。そして、そこでハーバリウムを買うのではなく、「作ろう」と思って日本ハーバリウム協会のレッスンに通い、数か月後には認定講師となった。現在ハーバリウムの素材には既成のドライフラワーなどを用いているが、いずれはその素材も自作したいと考えているという。

また、注ぐオイルの種類、完成してからの時間経過による変化などの実験も現在進行形でやっている。最終的には「自分の一本」と呼べるハーバリウムを作ることを目標にしているそうだ。

ハーバリウムは、植物を組み合わせる植物を空間とともに楽しむ立体的な芸術だ。同じ植物の立体芸術である生け花と決定的に違うのは、瓶の中という閉じた空間で作ること、標本ならではの優れた保存性のために長期間楽しめることだ。小さな瓶の中に閉じ込められた植物は、小さな妖精が舞っているような幻想的な世界を作り出しており、生け花のダイナミックな表現とは対の楽しみを与えてくれるようにさえ感じる。また、運びやすくインテリアとして楽しめ、「インスタ映え」する身近さも人気の理由のひとつだろう。さらにハーバリウムに触れる人が増え、瓶の中の世界が多様化していくことが楽しみだ。

取材・文・撮影・レイアウト = 板垣万由子



ハーバリウムの瓶に入れる素材。同じ植物でも様々な色に染められており、組み合わせは無限大だ



窓際にすらりと並ぶハーバリウムと、それを手に取る Nao さん。光が当たることでハーバリウムの美しさが一層際立つ



Nao(なほ)

日本ハーバリウム協会認定講師。他にも、特殊粘土でジュエルアクセサリーを作るクリシスドンネ・デコなど様々な分野の講師として活動している。東京都町田市の温泉施設「ロテン・ガーデン」への展示や、ワークショップの開催も行っている。

Iris-Style

JR 横浜線 相模原駅

矢部方面に線路沿い徒歩 10 分

<http://iris-style.com>

Instagram : @iris_style_herbarium

ハーバリウムを作る ~作って楽しむもうひとつの魅力~

「せっかくだから、ハーバリウムを作ってみませんか？」

取材が終わりかけたその時、Nao さんが声をかけてくれた。実際に作るのは鑑賞するのとは違った楽しみがあるはずだ。遠慮なく、貴重な体験をさせてもらうことにした。

まず、好みの色の花を選ぶ。紺色のアジサイと黄緑色のカスミソウで作ってみることにした。ある程度アジサイを入れたらカスミソウを入れてバランスを取り、またアジサイを入れるという作業を繰り返す。ピンセットで瓶に入れる作業はとても難しく、茎の末端を隠すにはかなりの器用さが必要だと感じた。瓶に入れ終わったら、保存用のオイルを注いでいく。入れた植物が崩れないようにゆっくり注ぐのがポイントだ。そして、蓋をして完成となるのだが、オイルを注いだ直後としばらく経ってからでは植物の透明感が異なる。この差も作った本人だからこそ楽しめる魅力のひとつだ。完成したハーバリウムが持ち運びにより中身が動いてしまうのではないかと心配になったが、Nao さんは「バランスの取れた配置なら崩れにくいし、もし動いてしまってもそれもまた面白い効果になる」と教えてくれた。

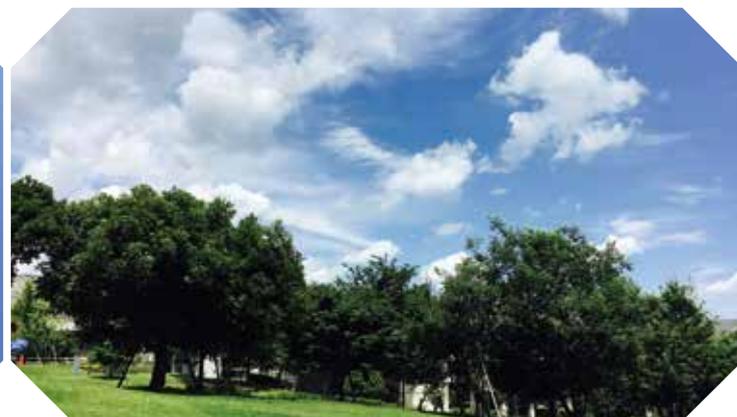
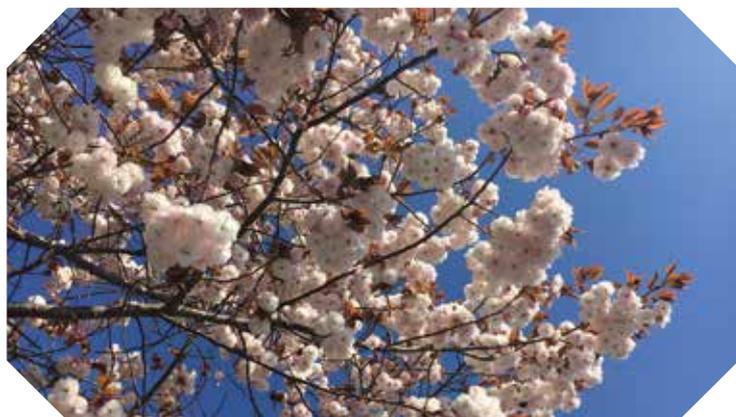


完成直後のハーバリウム。しばらくするとアジサイの花びらが透けてくる





自然豊かな多摩美術大学で四季の移り変わりを感じる。





多



摩



美



の



四



季



発見 「絵本でほっこりくつろぎカフェ」



カフェ「うさぎの絵本」店内風景

絵本は子どもだけのものなのか？子どもの頃読んだ絵本は印象深く記憶の底に留まっている。おとなになって読み返してみると子どもの時とは違った感想を抱くこともある。おとなになってから絵本に触れるきっかけとなる場所、それが絵本カフェだ。東京・下北沢の「うさぎの絵本」と神奈川県横須賀市の「うみべのえほんや ツバメ号」を訪ねた。

絵本とうさぎ。この新しい組み合わせの絵本カフェ「うさぎの絵本」があるのは、若者の街、下北沢だ。店内には生きているたくさんのうさぎと店主が趣味で集めた300冊以上の絵本、そして雑貨コーナーがある。雑貨は、客や友人からもらったものが大半を占めているそうだ。

うさぎと絵本が創る空間

カフェの店主川崎えつこさんは、動物好きのかわいらしい女性である。店を始めたきっかけは、川崎さんが世田谷文芸館（東京）に勤めていた時に開かれた絵本展でおとなになっても読める絵本の魅力に気がついたことだった。うさぎ好きの川崎さんには「うさぎと働きたい」という気持ちも強く、絵本カフェ

とうさぎカフェを合体したものになった。

開店当初はうさぎが人間に馴染んでくれるかどうか不安だったため、うさぎがいなくても成り立つように「うさぎの絵本」という名前を娘さんと一緒に考えてつけたという。



しかし、実際にカフェを運営してみると人間が来ることをうさぎが喜ぶという予想外の現象が起き、それをうれしく感じることもあったそうだ。

カフェに来る客は多種多様。強いていえば個性的な人が多いが、みんな自然体で楽しいという。近くのライブハウスの待ち時間に寄る人、幼稚園の先生、動物のいる空間を求めてやってきた小学校の先生、さらには会社員

の男性が一人で訪れることもある。最初は恋人同士だった人が来店して結婚の報告をし、やがて子どもをつれて来たこともあったとか。

* *

神奈川県横須賀市の京急線津久井浜駅から徒歩1分のところにある絵本カフェ「うみべのえほんや ツバメ号」（以下「ツバメ号」）を訪ねた。駅前には、時間の流れが止まったような昔ながらの街並みだ。そうした雰囲気の中で、ツバメ号は多くの客で賑わっていた。

ツバメ号は、店主の伊東ひろみさんが5年ほど前に運営を始めた。絵本カフェは、学生時代に絵本に触れる機会が多かった伊東ひろみさんの長年の夢だった。一度は諦めていたが、開店の2年ほど前、息子さんと進路の話

うさぎの絵本

東京都世田谷区北沢 3-30-1K ビル 2F
TEL&FAX : 03-3466-5081
URL : <http://usaginoehon.web.fc2.com/>



耳寄り
情報

宝島社より発売された『本物みたいなもふもふうさぎポーチ BOOK』のモデルのうさぎは「うさぎの絵本」にいるぶん君とこぶ君なのだそう。

をしているときに「なんでやらないのか」と聞かれたことが、足を踏み入れる一番のきっかけになったという。

人の輪を広げる絵本カフェ

「お茶を飲みながら絵本がある空間を楽しんでもらう」というコンセプトを実現するために2年ほどの準備期間を経て運営を開始した。「うみべのえほんや ツバメ号」という名前には、横須賀らしさや近くの海で夫とヨットで遊んでいたときの記憶など多くの思いが込められている。横須賀の海の独特のよ

さを知ってもらいたいという気持ちもあるそうだ。

開店した当初は小さな子どもと親が並んで絵本を読むというイメージだった。そのために、店内の椅子はベンチシートになっている。ところが蓋を開けてみると、親子連れだけでなくおばあちゃんと孫やひ孫という組み合わせも見られたほか、大人だけで来る客も多く驚いたという。さらには、図書ボランティアや朗読者、小学校の校長、保育士などの来訪も多く、おすすめの本を教えあったりしているそうだ。

ツバメ号の2階はギャラリーになっている。開店当初はただの和室だったが、伊東さんが大工と相談しながら定休日に作業し、客や友人と一緒に作り上げたという。

このギャラリーでは、伊東さんが見たいと思った絵本の原画展をよく開催している。ここでは、作家とのつながりが生まれる。都心を外れた町の小さな店が、さまざまな人々の出会いの場所になり、人の輪を広げている。とても感慨深い話である。

取材・文・撮影・レイアウト＝佐藤仁奈



うみべのえほんや ツバメ号

神奈川県横須賀市津久井 1-24-21
TEL&FAX:046-884-8661
URL : <http://umibenohonya.com/>



うみべのえほんや ツバメ号 外観

店主のお二人に教えてもらいました!

伊東ひろみさんお勧めの絵本 『ナマケモノのいる森で』

文：ソフィー・ストラディ しかけ：アヌック・ボワロベール、ルイ・リゴー、
訳：松田素子 出版社：アノニマ・スタジオ

さまざまな楽しみ方ができる仕掛け絵本だ。細やかな仕掛けも魅力的だが、加えて環境問題を題材にし内容が興味深いものになっている。ナマケモノという動物を出すことで、より深く考えさせられる。

川崎えつこさんお勧めの絵本 『トマトさん』

作・絵：田中 清代 出版社：福音館書店

作者の田中清代さんは多摩美術大学絵画学科の卒業生。「うさぎの絵本」も訪れたことがあるそうだ。大胆なトマトの表現と独特の表情が目を引き。擬人化された「トマトさん」のためにみんなで協力をするという絵本の王道をついたストーリーになっている。

不定期連載「師の言葉」

第1回 室越健美 (アーティスト、元多摩美術大学絵画学科油画専攻教授)

「デザインは必要なのか？」



『2EPOCHS』会場風景。室越先生の仕事場が再現されている(撮影=若林亮二、右ページの上2点も)

昨年11月、本学八王子キャンパスのアートテーク・ギャラリーで、絵画学科で長年教鞭を執った室越健美先生の退職記念展『2EPOCHS』が開催された。木の箱を額縁のように使った作品に鮮烈な印象を覚えた多摩美生も多くいたのではないだろうか。退職しても今なおあふれる教育者としての思いを聞いた。

「しばらくは大学の研究室と自宅の片付けでんやわんやでした」

室越健美先生は、モダンな喫茶店でアイスコーヒーを飲みながら近況を話す。大学の研

究室に置いていた資材や道具類は家に入りきれないほど大量にあって整理に手一杯、ほかのことが手につかない状況だったという。ようやくひと段落ついてドローイングに挑戦したばかりだった。改めて本学の思い出を話してもらうには、なかなかいいタイミングだったようだ。

学生の頃から抱き続けてきた疑問

退職記念展で展覧会名にした『2EPOCHS』すなわち「2つ」の「エポック」とは、室越先生が過去に行った展覧会のうち最も印象的だった二つを指すそうだ。「普段は数年から10年くらいのスパンで一つのテーマを決めて作品を作ったうえで個展を開くのが僕のやり方です。

例えば『栖(すみか)』というテーマで7～8年制作を続けたことがあります。『2EPOCHS』で取り上げた2つはその中ではやや特殊で、自分本来のあり方からは少し離れた実験的なテーマだったのです」

一つは『源氏物語絵巻』や『釈迦涅槃図』など日本の古典絵画をオマージュ(賛美)した2003年の『室越健美 オマージュ展』、もう一つは米国の現代美術作家ジョセフ・コーネルの作品に触発されて制作を始めたボックス作品を集めた2014年の『室越健美展 匣(はこ)』。特に『オマージュ展』の根本には学生の頃より抱き続け、そして今もなお疑問やジレンマが根付いているという。はたして疑問やジレンマとは何だったのだろうか。



『室越健美 オマージュ展』の作品



『室越健美展 匣(はこ)』の作品

1970年代後半、東京芸術大学へ進学した頃日本は高度経済成長期のさなかで、アメリカに追随するのが当たり前の時代だった。美術の世界でもアメリカから抽象表現主義などが流れ込み、「自分を含めて誰もがアメリカナイズに身を投じていた」という。一方で、その風潮にはずっと疑問を抱き続けていた。

「僕って日本人だよなあ、なのになぜ海外の美術の真似ばかりしているのだろうといつも思っていた」

何を描いても達成感を得られない息苦しい日々が続いた。

講義で力説したこと

東京芸大大学院1年生の時に五島美術館(東京)で開催された『源氏物語絵巻』展の内覧会で、すごい経験をした。今ではまず考えられないことだが、ガラスケース越しでない、むき出しの『源氏物語絵巻』を目にしたのだ。そして、明治以降の日本人が切り捨てて来た江戸以前の文化の完璧と思える表現力と充実感に衝撃を受けたのである。

そこで自覚したのは、日本人が海外に追随することによって過去の文化を切り捨てる弊害に侵されていたことと、その姿勢が知らず知らずのうちに「DNA」に刻まれているのではないかという内なる恐怖だった。

月日が流れ、1992年に本学で教鞭を執り始めた後のある講義で、日本の急激な欧米化について論じた。テーマは「デッサンは必要なのか?」。どんな内容だったのだろうか。

「なかなかインパクトがあるテーマでしょう。美大の先生がそんなことを教えていいの!? み

たいな」と冗談めかして語り続けた。

「明治になって黒田清輝や安井曾太郎らがフランスで吸収して持ち帰ったのは、いわゆるルネサンス絵画以来のアカデミックなデッサンの技術でした。油絵の具の開発や消失点を設けた線遠近法により、2次元の平面上で3次元の物体の再現がかなりリアルにできるようになった」

しかし、それはあくまでも技法の一種であって絶対的なものの見方ではないはずだ。事実、セザンヌはより本物に肉薄するために画面の中に多くの視点を設け、レオナルド・ダ・ヴィンチは線のみによるデッサンでリアリズムを追究している。大学で石膏デッサンをしていても、西洋の真似事にすぎず「絵画の本質を外れているのではないか?」という疑問が常にあったという。そして学生たちに語ったのは、「西洋の明暗法や陰影法からなるデッサンは一つの方法にすぎない。大切なのはもの本質をどう捉えようとしているか」だった。

講義では、情報に敏感な学生たちこそ、時流や他者の考えばかりに身を委ねるのではなく、自分が今立っている場所を考えることこそが重要なのだと力説。旧習から自分たちを解放する勇気を持ってほしいと願っていた。

「多摩美」という場所

「多摩美はとていい大学だと思う」と感慨を込めた口調で語る。「社会に屈せず、柔軟性がある。古い考え方に縛られない革新的な雰囲気現代美術を背負っている」と常々感じていたようだ。そんな中で、実は学生たちとのやり取りも、教員だった自分のバロメーター

になっていたという。

「自分がうまくいってる時は批評会でもいい言葉が出てくるし、質問にもすらすらと答えられる。逆に調子が悪いと言葉が出て来ない。僕は常に正しくていいことを伝えたい。だから、いい絵を描かねばならないという気持ちにさせてもらいました」

学生の存在は、制作の原動力にもなっていたようだ。

取材・文・撮影(*1)・レイアウト＝豊島留南



(*1)

室越健美 (むろこし・たけみ)

1947年群馬県生まれ。79年に東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。85年の具象絵画ビエンナーレ(神奈川県立近代美術館)、バーゼル国際アートフェア(スイス)等国内外で多くの展覧会やアートフェアに出品。92年に多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻講師、93年に同助教授、98年に同教授に就任。高島屋で2003年個展「オマージュ展」、14年「ボックス・匣展」等個展を多数開催。17年に本学八王子キャンパスアートテーク・ギャラリーで退職記念展「室越健美退職記念展 2EPOCHS」。18年3月、本学を定年退職。アーティストとして活動が続いている。

Whoops! 見聞記

生命の樹を上げ！

今年3月から《太陽の塔》内部の公開が始まった。大阪で開かれたかの日本万国博覧会から48年。半世紀の歳月を経て、岡本太郎の思い描いた「祝祭」への扉が再び開かれた。その全貌に迫るべく、大阪府吹田市の万博記念公園を訪れた。

「《太陽の塔》って男と女のどっちだと思う？」

大阪モノレール万博記念公園駅行きのモノレール車内からは、そびえ立つ《太陽の塔》を周囲から見渡すことができる。その道中、同行していた友人にこう尋ねられたのだ。一拍置いて「女かな」と答えた。太陽に生命を育むエネルギーのようなイメージがあって、それが何だか母のようだと感じたからだ。友人も同じ考えだったらしく、「気が合うね」と微笑まれた。

3月23日の昼下がり、かねてより念願の万博記念公園の地に降り立った。目当てはもちろん、1970年の日本万国博覧会から48年ぶりとなる岡本太郎の《太陽の塔》内部の公開。大阪在住の友人が奇跡的に二人分の枠を勝ち取ってくれたのである。清々しい快晴で、建築基準法の関係で30分に80人しか一度に塔内に入れないので、ゆったり見ることができる。まさしく絶好の鑑賞日和だった。

今まではネットの画像でしか見たことなかった《太陽の塔》が目前にあった。想像以上に胴はどっしりとしてたくましい。頭の片隅に「肝玉かあさん」という単語がフツと浮かんだ。塔の根元部分に設けられた入り口から中に一歩踏み込むと途端に日差しが途切れ、黒塗りの空間が広がった。これより先は撮影禁止のエリアだ。緊張が足元よりは上へ上がってくる。

最初の展示空間は、世界各地の民族の仮面に囲まれて「地底の太陽」が鎮座していた。言葉では形容しがたい奇怪な音が反響し、時折「地底の太陽」の表面に血のように赤い手形がベタァッ！と浮かび上がる。かと思うと、無数の棒人間がワラワラと湧き出て来る。最新技術によって再現される万博の地下展示の世界観。その場にいた観客全てが国唾を呑み、その有様を見つめていた。

そしていよいよ、待望の「生命の樹」の根本へと足を踏み入れた。怪しい色をした謎のイ

キモノがうごめいている。「樹」の根元に張り付いた三葉虫の群れは、今にもカサカサとはい出しそうだ。

「そこにサソリがいるんですけど、見えにくい位置にあるので注意して見てくださいねー」いかにも浪速の兄ちゃんといった陽気な感じの若い男性ガイドに導かれるまま、樹の周りをぐるりと取り囲む階段を登る。真紅のささくれ立った壁に厳かに響き渡る重低音のメロディ。何だかゲームの主人公になった気分だった。冒険の果てに魔王の棲む宮殿にたどり着き、この世界の真実、すなわち人間の正体を目にするのだ。自然と階段を踏み締める足に力が入った。

樹の周りにいたのは、爬虫類や哺乳類をはじめ図鑑の中でお馴染みの生き物。何の変哲もない生命の進化の過程だが、違うのは、鑑賞者がその群れの中に紛れ込んで、共に上を目指していることだった。正直、今まであんなに奇妙な生物と人間が同じ海から生まれ出た細胞でできているなどという話は、今ひとつピンと来なかった。だが、こうして一本の樹に集結し、共に上を目指すこの空間には、奇妙な一体感のようなものがあつた。世界一スケールの大きな珍道中、といったところか。

いよいよ、猿人がたむろするゾーンに突入した。この壮大な旅も終盤だ。

「人間が頂点にいないのがいいね」と友人が呟いた。木の先端は塔の頂点に達してなお、すくすくと際限なく伸びていくようだった。ちょうど塔本体が万博開催時に丹下健三の建築の大屋根をボカンと打ち破ったように。階段を上りきった後は、かつて空中展示へと続いていた腕の中を覗き込む。むき出しの鉄骨が張り巡らされた未来への路だ。まさしく、太古と今、そして先の見えない未来が塔の中で一つに溶け合った瞬間だった。ここに来る前に友人と交わした談義を思い出す。《太陽の塔》はまさしく「女」だった。《太陽の塔》という母胎が産み落とした生き物は幾多の生と死を、い



のちの循環を繰り返しながら一本の樹をはい登る。自分はまさにその旅の一員だったのだと、あの原色の赤で満たされた世界を思い浮かべるときに実感する。

「あれ見たらもうかわいいって言えないね」「まさかあの中にあんなもん生やしてるとはね…」

帰りのモノレールの中、遠くなっていく《太陽の塔》をぼんやりと眺めた。

「《太陽の塔》、満を持して21世紀に復活」

当初はこんなイメージを抱いていた。とんでもない。むしろ「脱皮」という言葉のほうがしっくりくる。渦巻くような激しい力を包み込んだまま、あの塔は黙して機を窺っていたのだ。

生前、太郎が万博に託した思い、すなわち万博を古代より受け継がれてきた「祝祭」の場に作りかえ、近代化に揉まれた日本人たちが見失ってしまった生命の歓びを再び呼び起こす試みは、人々に受け入れられることなく不発に終わっていた。しかし、意気消沈することはない。こうして太郎のリベンジの年がやってきたのだから。なお、猿人たちの集いの中にシメシメと皆の様子をうかがう太郎の姿を探していたのは内緒である。

取材・文・撮影(*1)・レイアウト = 豊島瑠南



《太陽の塔》の内部。「生命の樹」がそびえ立つ様子は圧巻(写真提供=大阪府)



「地底の太陽」とずらりと並ぶ民族仮面 (写真提供=大阪府)



《太陽の塔》の腕の中から見ると… (写真提供=大阪府)

《太陽の塔》
大阪府吹田市千里万博公園

「太陽の塔内部公開」(予約制)

オフィシャルサイトより予約申し込みができる
<http://taiyounotou-expo70.jp>

★関連情報★

企画展『太陽の塔への道』
2018年5月30日～10月14日
岡本太郎記念館 (東京都港区南青山 6-1-19)

企画展『太陽の塔』
2018年9月15日～11月4日
あべのハルカス美術館 (大阪市阿倍野区阿倍野筋 1-1-43 あべのハルカス 16階)

映画『太陽の塔』
監督：関根光才 配給：パルコ
2018年9月29日から渋谷・シネクイント、新宿シネマカリテほか全国で公開

Whooops! 見聞記

未完成の裸体像に ミケランジェロの彫り姿を見る

イタリア・ルネサンスを代表する芸術家ミケランジェロの大理石彫刻2体が、国立西洋美術館で開催中の「ミケランジェロと理想の身体」展で公開されている。そのうちの一つ《ダヴィデ=アポロ》は、未完成作品ゆえに作家の生々しい彫り姿を想像させる。

数百年前のイタリアで古代ギリシャ・ローマ文化の復興を目指した「ルネサンス」の立役者となった芸術家の一人、ミケランジェロ（1475～1565年）の作品を普段日本で見る機会はほとんどない。ヴァチカン宮殿システーナ礼拝堂の壁画や天井画にしても、フィレンツェにある4メートル高のダヴィデ像にしても、日本で公開することはほぼ不可能だろう。ミケランジェロ本人は「自分は画家ではなく彫刻家だ」と主張したと伝えられているが、現存する大理石彫刻は世界で約40点にすぎないという。

そんなことを考えると、国立西洋美術館で開かれている「ミケランジェロと理想の身体」展に《ダヴィデ=アポロ》と《若き洗礼者ヨハネ》という2体の大理石彫刻が出品されたのは、なかなか画期的なことである。同じ型から複数のエディションが鋳造されるブロンズ彫刻とは違って、ミケランジェロの彫刻の多くは大理石製、つまり石を手ずから彫った一品ものである。ミケランジェロは幼少の頃、大理石の石切り場の近くで育ったという。作

家にとって身近で渾身の技法による作品を、ぜひ実際に目にして楽しんでみてはどうだろうか。

特に作家が55歳の頃に制作したという《ダヴィデ=アポロ》については、未完成作品であるところに着目したい。完成した作品にはない味わいがあるのだ。ミケランジェロには未完成作品がいくつもあるという。それらがなぜ未完成なのかということについては、彫っているうちに大理石自体に欠陥があることが分かったり、思い通りに彫れなかったりとさまざまな理由が考えられるそうだ。しかしそのおかげで、彫っている途中の姿を見ることができるのである。ミケランジェロはどうやら靈感が降りてくる芸術家だったと見られるふしがある。同展監修者のルドヴィーカ・セプレゴンディさんによると、「ミケランジェロは大理石の塊の中に、完成した姿を見ていた」というのだ。つまりその姿を彫り出すのが彫刻家の仕事というわけだ。《ダヴィデ=アポロ》にはノミの跡が残っている。そこには、間違いなく作家の息吹きを見

ることができる。もちろん、たとえば20代半ばにして非の打ち所がない美を打ち立てたサン・ピエトロ寺院の《ピエタ》のような完成作品は、何ものにも代えがたいオーラを発している。だが、未完成の作品を見ていると、むしろ作家の肉感的な側面あるいは、彫っている姿そのものが浮かび上がってくる。

この展覧会はミケランジェロを顕彰するだけの内容ではなく、古代ギリシャで育まれた人体の理想美がどのようにルネサンスに受け継がれたかを見せている。まずは古代ギリシャのオリムピックのアスリートたちをもほうふつさせる筋肉質の男性の裸体に見出した至高の美を、大理石という古代ギリシャと同じ技法で継承したのがミケランジェロだった。しかし、1000年以上の時を経て出現したのは、やはり単なる古の美のコピーではなかった。《ダヴィデ=アポロ》をじっと眺めていると、神が示した姿を彫り出す喜びに打ち震える「ミケランジェロ」を感じるのである。

取材・文・撮影・レイアウト＝小川敦生



㊤《アメルングの運動選手》（紀元前1世紀、大理石、高さ131cm、フィレンツェ国立考古学博物館）
展示風景。古代ギリシャの彫刻家ミュロンが作った像の「ローマン・コピー」（古代ローマ時代の精密な模刻）とされる

㊦ミケランジェロ《若き洗礼者ヨハネ》（1495～96年、大理石、高さ130cm、ウベダ、エル・サルバドル聖堂、ハエン（スペイン）エル・サルバドル聖堂財団法人）展示風景。ミケランジェロ20歳頃の作品。若い頃から精度の高い造形力を身に付けていたことが分かる

「ミケランジェロと理想の身体」

2018年6月19日～9月24日、国立西洋美術館（東京・上野）



ミケランジェロ《ダヴィデ=アポロ》（1530年頃、大理石、高さ147cm、フィレンツェ、バルジェッロ国立美術館）展示風景。ギリシャ神話のアポロとダヴィデの両方の可能性があるため、この名称で呼ばれているという



The 11th International SHIBORI Symposium 2018 in JAPAN

Shibori - 融合と進化

多摩美術大学美術館
Tama Art University Museum

2018.7.1. Sun → 8.19. Sun

